

# 彗星課月報

Monthly Report of the Comet Section, January, 2006

課長 関 勉 T. Seki

幹事 松本敏一 T. Matsumoto 幹事 佐藤裕久 H. Sato

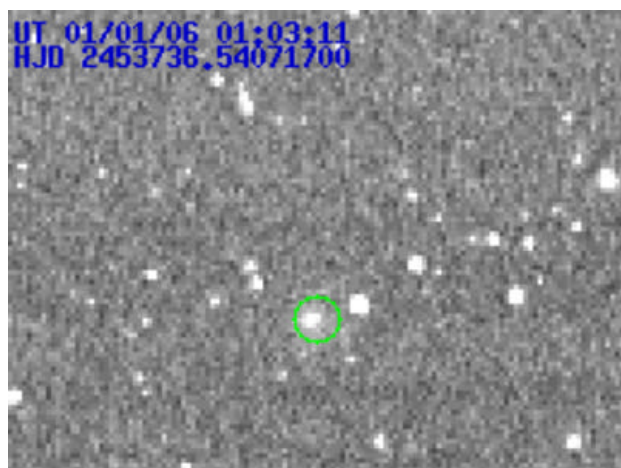
## 1月の状況 (佐藤)

C/2006 A1 (Pojmanski)

IAUC 8653 などによれば、2006年1月1日と4日、Grzegorz Pojmanski (Warsaw 大学天文台)は、チリの Las Campanas にある全天自動掃天 (ASAS-3)の口径 65-mm f/2.8 望遠鏡で得た CCD 画像から 1 のコマのある彗星を発見した (写真 a,b)。2005年12月29日の発見前の ASAS-3 画像にも写っていた。

S. Roland (Montevideo, ウルグアイ)は、0.46-m 望遠鏡により、コマが約 1 ほどの彗星であることを確認した。また、K. Cernis は、SWAN/SOHO の Web サイトに 2005年12月25日から3日間写っていると報告した。

その後の観測から近日点通過日は 2006年2月22.2日(TT)であることがわかった。日本からは、2月25日の明け方、東南東に高度約 10° のところに約 5 等ぐらいに見えそうだ。



(写真 a) C/2006 A1 (Pojmanski) 2006,01,01  
01h 03m 11s (UT), 65mm (180/2.8) + CCD + V filter  
© The All Sky Automated Survey

(写真 b) C/2006 A1 (Pojmanski) 2006,01,07  
Jan. 07.50~7.54 (UT) exp.15mx2@4min 41cm L+ EOS 10D  
© John Drummond, Gisborne, New Zealand

次の眼視観測がある。

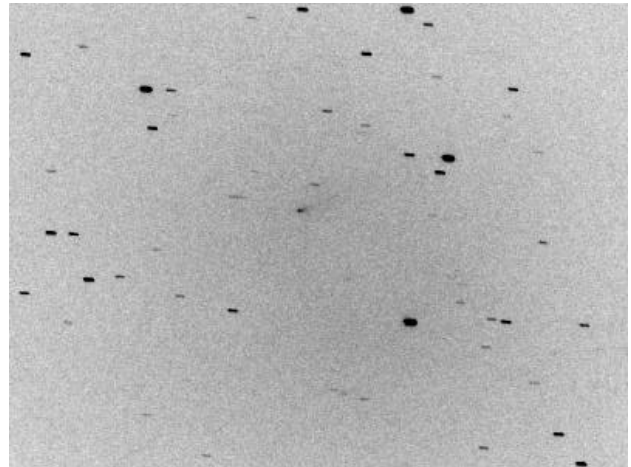
C/2006 A1 (Pojmanski)

2006	UT	m1	Dia	DC	Tail	p.a.	Trans.	Seeing	Instru.	Observer	Note
Jan.	11.44	10.8	2	3	-	-	-	-	85×46cmL	加藤英司	moonlight
	29.44	7.3	4	6	-	-	-	-	85×46cmL	"	+7×32B

73P/Schwassmann-Wachmann 3

IAUC 8659 などによれば、J. A. Farrell (Jemez Springs, NM) は、0.41-m f/8.4 反射 + CCD で、1月6.488日 UT、73P の C 核を追って 23.2 西側を同じく動いている 18.8 等の天体を観測した。この天体は、Z. Sekanina (JPL)によれば、1995年~1996年の B 核に連結するが、1995年~2001年の A 核、E 核または F 核とは一致しないとしている。

一方、C核(写真 c,d)の方は、ハッキリとした尾が見え、光度も着実に上昇している。  
 スペインの Juan José González が 1月 4.19日 UT に観測した。20cm Schmidt-Cassegrain  
 望遠鏡 x160 による全光度は、15.2 等、DC 9 であった。



(写真 c) 73P/Schwassmann-Wachmann 3 2006,01,08 (写真 d) 73P/Schwassmann-Wachmann 3 2006,01,29  
 2h 22m~42m (JST) Double exp. 60cm L + TP2415 Film 2h 00.0m~15.3m (JST) exp.80s x6 MN61 + CCD  
 芸西天文台 関 勉 三重県伊賀市上野 田中利彦氏

P/2000 EC<sub>98</sub> = (60558)(写真 g)

IAUC 8656 によれば、2005 年 12 月 30.50 日 UT に Palomar 山の 5-m 反射 + CCD で捉えた Centaur 型の小惑星 (60558) 2000 EC<sub>98</sub> の画像に彗星状のコマがあった。光度は 17.5 等。

1月 8 日朝、国内のメーリングリストに埼玉県上尾市の門田健一氏から次のメッセージが入った。「彗星であることが判明しましたので、向けてみたら、視直径 1 分角の明るいコマが見られ、ビックリしました。」1 週間ほどで、何と 14.8 等まで急増光していた。

さらに「IAUC 8656 には 17.5 等 (Dec. 30) と掲載されていましたが、30 秒露出(標準星のフレーム)をちらっと見ただけで、惑星状星雲のような明るくて丸い天体が写りました。」

その後各地でこの彗星に望遠鏡が向けられた。横浜市の吉田誠一氏は、急遽この彗星を観測リストに加え、茨城県内で眼視観測に成功した。

2006	UT	m1	Dia	DC	Tail	p.a.	Trans.	Seeing	Instru.	Observer	Note
Jan.	08.78	14.4	0.5	3	-	-	-	-	257x40cmL	吉田誠一	comASAS-3

その他発見または検出された彗星は次のとおり。

P/2005 XA<sub>54</sub> (LONEOS-Hill)

1月 6.41 日 UT、Rik Hill は、Catalina スカイサーベイの画像から西北西におよそ 20 伸びた彗星を発見した。MPC の T. Spahr によって、12 月 4 日 LONEOS によって見つけられた天体 2005 XA<sub>54</sub> と同じであることがわかった。(IAUC 8656, 2006 Jan. 6)

P/2005 YQ<sub>127</sub> (LINEAR)

2005 年 12 月 28.2 UT、LINEAR によって発見された天体 2005 YQ<sub>127</sub> について多くの観測が、彗星状であることが報告された。7.6 年の短周期彗星であった。(IAUC 8658, 2006 Jan. 13)

C/2006 A2 (Catalina)

1月 21.16 日 UT、小惑星状の天体が Catalina スカイサーベイによって発見された。幾人

かの CCD 観測者によって彗星状であることがわかった。(IAUC 8662, 2006 Jan. 24)  
1月の後半最初の彗星でありながら C/2006 B1 とせずに C/2006 A2 となっている。

P/2000 C1 = P/2006 A3 (Hergenrother)

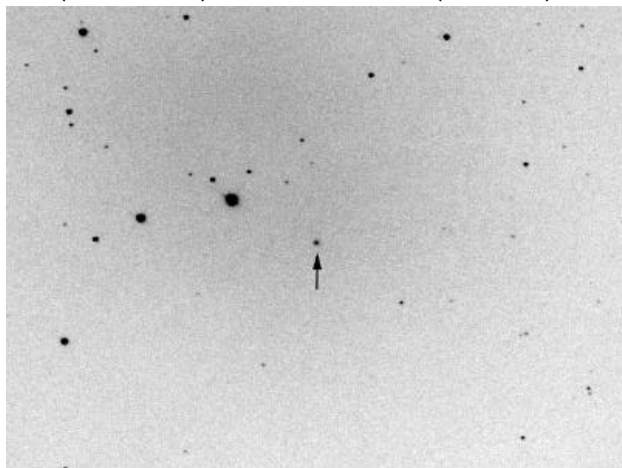
Mt. Lemmon の 1.5-m 反射鏡の 1月 6日、7日と 27日の CCD 画像から P/2000 C1 を検出した。この彗星は、予報位置より約 3 東側で見つかった。(IAUC 8664, 2006 Jan. 27)

なお、OAA 彗星年表 2006 の村岡健治氏の予報軌道は次の軌道に対し、Delta T = -0.20 day であった。

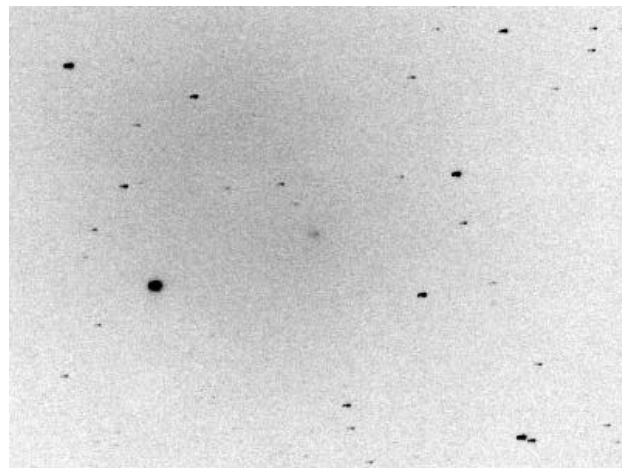
C/2006 B1 (McNaught)

1月 27.62 日 UT、R. H. McNaught は、Siding Spring サーベイの 0.5-m Uppsala Schmidt 望遠鏡による CCD イメージより、少し拡散状の彗星を発見した。(IAUC 8665, 2006 Jan. 30)

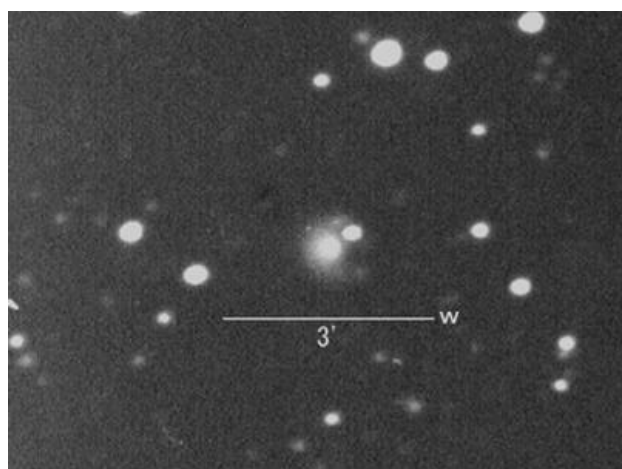
その他比較的明るい彗星は、C/2005 E2 (McNaught)、29P/Schwassmann-Wachmann 1 (写真 e, f)、C/2003 K4 (LINEAR)、C/2003 WT<sub>42</sub>(LINEAR)、21P/Giacobini-Zinner、C/2005 N1 (Juels-Holvorcem)、P/2004 VR<sub>8</sub> (LONEOS) などであった。その他やや暗い彗星では、C/2004 Q2 (Machholz) や 71P/Clark (写真 h) であった。



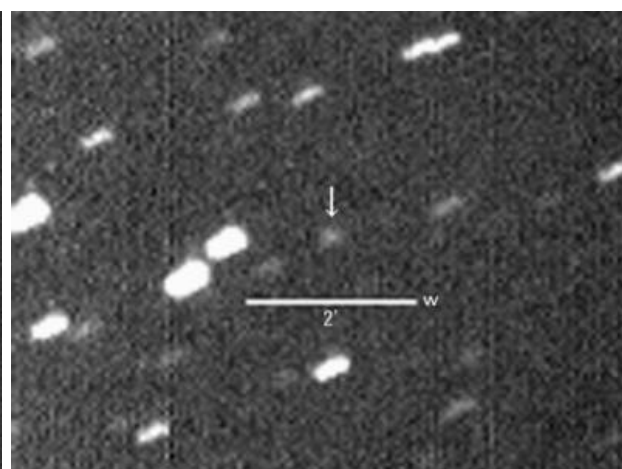
(写真 e) 29P/Schwassmann-Wachmann 1 2006,01,25  
21h 00.0m ~ 11.3m (JST) exp.80s x6 MN61 + CCD  
三重県伊賀市上野 田中利彦氏



(写真 f) 29P/Schwassmann-Wachmann 1 2006,01,29  
19h 20.0m ~ 35.3m (JST) exp.80s x5 MN61 + CCD  
三重県伊賀市上野 田中利彦氏



(写真 g) (60558) P/2000 EC<sub>98</sub> 2006,01,09  
3h 06.9m ~ 55.1m (JST) exp.120s x19 25cm + CCD  
長野県長野市 大島雄二氏



(写真 h) 71P/Clark 2006,01,08  
3h 21.9m ~ 34.9m (JST) exp.240s x3 25cm + CCD  
長野県長野市 大島雄二氏